

『他力信仰録』より

1 血潮の跡

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

如来の興世にあひがたく

菩薩の勝法きくことも

善知識にあふことも

よくきくこともかたければ

一代諸教の信よりも

諸仏の経道ききがたし

無量劫にもまれらなり

をしうることもまたかたし

信ずることもなほかたし

弘願の信樂なほかたし

難中之難とときたまひ

無過之難とのべたまふ

聞信の一念に下々の凡夫が無上覚位を極めようと言うのだから、一朝一夕では絶対不思議の他力の堂奥には入られない。助くる法は一乗究竟の極説であるから浄土には往き易いけ

れども、助かる地獄はい出の機に熟未熟があるから 即得往生する人は稀である。

逢い難い仏法に逢い、而も弘願の一乘法を聞きながら由なき自力の執心にほだされたなら、万劫にも浮かぶ瀬が無いのだからお互いに真剣で求めましょう。

理屈は易いが実際は難しい。道理は直に判るけれども 体験の世界は一朝一夕では得られ

ない。私も初めの程は 堕ちる者をお助けと理屈が判り有難く成ったのを信仰とばかり

思っていた。それを忘れないのが安心であると心得ていた。人様は何故にあんなに

手間取って苦しむのであろうかと不思議な様に思っていた。そして自分自身と言うものを

念を押して考えた事が無く、ただ親様の仰せではないか、疑って何にするかと心の秘密の蔵にちゃんと錠を下ろして疑わないと言う錦を覆せていた。誰が何と言ったって親様が其

の儘来いよと仰せられるのだから之ほど確かな事はない。助けて貰う事に安心したのが信心

ではないかと胸に納めていた。自分はすなおに安心は戴いている、何処を探して見ても疑

いと言うやましい物は微塵ばかりも無いから お領解は戴いていると心得ていた。自分は

俗人から僧侶にさして戴いた程因縁も深いし、学問もさして貰っているから 悪趣には沈ま

ないであろうと心から感謝していた。

こんな信仰を持ち合わされているならば決して悪いと言うのではないが まだまだ進むべ

き余地は充分有ると思う。泥田の水をコップに入れて澄んだ処ばかり見て喜んでる信仰

であって、臨終や逆縁に逢えば忽ち疑雲の巻き起こる薄氷の様な信仰であるという事を知ら

ないのである。自力疑心の千尋の谷底が脚下に在る事を知らないで空の高さを眺めつつ歩

んでいるのである。疑わ^{うたが}ないと言^いう型^{かた}に執^{とら}われて 疑^{うたが}い抜^ぬいて疑^{うたが}い無^なく救^{すく}われたと言^いう

自^じ覚^{かく}まで進^{すす}み得^えない人^{ひと}である。苦^くの無^ない人^{ひと}には楽^{らく}は無^ない。疑^{うたが}った人^{ひと}でなければ晴^はれた味^{あじ}は

判^{わか}らない。疑^{うたが}いの蓋^{ふた}を取^とった積^{つも}りで益^{ます}々堅^{ます}固^{けん}に閉^とざすのが自^じ力^{りき}の迷^{めい}情^{じよう}である。この心^{こころ}を見^みな

い様^{よう}にし、これが有^あつては往^{おう}生^{じよう}の妨^{さまた}げに成^なるからと蓋^{ふた}をし、或^{ある}は自^じ分^{ぶん}の見^み苦^{くる}しさを親^{おや}様^{さま}が

御^ご承^{しょう}知^ちでお助^{たす}けと誤^ご魔^ま化^かして 真^{しん}実^{じつ}らしく粧^{よそお}うているのであるが、自^じ分^{ぶん}の魂^{たましい}の動^{うご}きを見^みて恐^{おそ}

れ、業^{ごう}煩^{ぼん}悩^{のう}の唸^{うな}りを聞^きいて不^ふ安^{あん}を抱^{いだ}く様^{よう}な者^{もの}は 未^{いま}だ如^{によ}実^{じつ}に法^{ほう}を聞^きいてはいない。機^き法^{ほう}

一^い体^{たい}、仏^{ぶつ}凡^{ぼん}一^い体^{たい}は死^し後^ごの事^{こと}ではなく、信^{しん}楽^{ぎよう}開^{かい}発^{はつ}の刹^{せつ}那^なに成^{じよう}就^{じゆ}する魂^{たましい}の大^{だい}満^{まん}足^{ぞく}であるが、極^{ごく}悪^{あく}

最^{さい}下^{いげ}の根^{こん}機^きならこそ極^{ごく}善^{ぜん}最^{さい}上^{じよう}の妙^{みよう}法^{ほう}が一^い体^{たい}に働^{はたら}くのではないか。機^きを見^みて恐^{おそ}れるのは法^{ほう}の

真^{しん}実^{じつ}が貫^{つらぬ}いていないからではないか。真^{しん}の光^{こう}明^{みよう}の世^せ界^{かい}は法^{ほう}を見^みてよし機^きを見^みてよし、散^{さん}乱^{らん}

放^{ほう}逸^{いつ}の此^この機^きに輝^{かが}く妙^{みよう}法^{ほう}を見^みてこそ 絶^{ぜつ}对^{たい}の安^{あん}住^{じゆう}が得^えられるのではないか。

一^{ひと}口^{くち}に他^た力^{りき}他^た力^{りき}と言^いえは易^{やす}い様^{よう}であるけれども、他^た力^{りき}の真^ま似^ねをし^{した}他^た力^{りき}と、他^た力^{りき}に成^なった

他力、即ち他力の中の自力と 他力の中の他力とは 自力と他力の天地の違いがある。多くの同行は他力の言葉に誤魔化され 他力に成る事を忘れてはいないか。他力至極の金剛心は道理理屈だけ調子を合わせて疑わないうたが 安っぽい領解とは違うぞ。心得振りや安心のし振り、学問や智慧の間に合う様な絶対他力ではないぞ。見れば見る程、聞けば聞く程自分の不実な呆れ返り、箸にも棒にも掛からぬ、墮ちるも上がるも知り切らない、地獄と聞いても驚かず、極楽と聞いても求め切らない、自分で自分の心の判らない必墮無間の有りつたけを無条件で赦す不可称不可説不可思議の絶対他力の喚声を 南無阿弥陀仏で聞いた時に獲らるるのである。

今迄も私の様な悪い者と言っていた。 極重の悪人は私一人と言っていたが、悪い者と言えない間は余程高い処にいる悪い者で 決して地獄墮ちではない。 法に照し尽くされた時、思うも言うも行ふも総てが、虚仮不実であり、現に五逆を犯しつつある悪魔が 自分

自身であり、謗法闡提の叛逆の徒、獅子身中の虫こそ、姿を僧侶に粧うている私であると驚かされ、口や意に尽くせぬ罪業、十方法界の悪を負うて泣いた法龍が 十方法界を只で恵まれ 煩惱菩提体無二の境地が恵まれたのである。

嗚呼弘願他力の妙法は獲得し難い。弘誓の強縁は多生にも遇い難い。真実の淨信は億劫にも得難い。他力程獲難いものもなく、又、他力程獲易いものも無い。獲易いのみを知って獲難い事を知らない者は深刻でない。獲難いのみを知って獲易いを知らない者は他力ではない。

たまたま真剣に求めて命懸けで布教をしている人を見ると、「一犬虚を吠えて万犬実と伝う」の如く、自分には何の煩悶もなく、何等求道した覚えも無く、体験の妙味も更になく、只々説教本の喩話くらいを暗記して信仰を片付けていて、悪辣な手段を以て其人を陥れ、罵詈譏言をしてやれ 異安心じゃ、地獄秘事じゃ、機歎きじゃと八方から攻撃しているけれ

ども、本当の異安心を知っているだろうか。

又正当な安心を心得ているだろうか。書物

に書いて有るのは書いた人の安心であつて自身の安心ではない。書物の通りに信ずればよいかも知れないがそれは真似であつて真実ではない。文字ばかり読まずに腹を読まねばならぬ。学解を知ったので往生の解決が付くのではなく真実の生命に触れなければならない。聖人様が、

「然るに濁世の群萌穢惡の含識乃し 九十五種の邪道を出て半満権実の法門に入ると雖も真なる者は甚だ以て難く 実なる者は甚だ以て稀なり。 偽なる者は甚だ以て多く虚なる者は甚だ以て滋し」

と仰せられた様に 真心徹到している信者は国に一人か郡に一人かと言わるる程少いのである。 人の求めない処を求めている、聞かない声を聞いている、言わない事を言っている、それだけ深刻であり、それだけ自信が有るのである。聞き流しに聞いている人達が自分の

しんこう どうよう ふせ ため いあんじん ほ むり ひと み あんじん ちが

信仰の動揺を防ぐ為に、異安心く と吠えるのは無理もない。その人から見れば安心が異

うのだから。而し違うてこそ仕合せである。死んでからの往生を夢見る人と、現在の一刹那に救われなければ永遠に救われないと求めた者と同様であるべき筈がない。 少々 の照ら

され方では悪人が悪人と判らず、一通りの苦勞では間違ひ者が間違ひ者と言う自覺は得られないのだから。

私は小さい時から仏縁が深かった。

仏教大学に在学中でも、母一人の生血を吸うて

僧侶に成る私は 他の学生の真似をしてはならない、一日一日が真剣でなければならぬ、

人様を導いて上げなければならぬ、人並の勉強では人並の者にも成れないと思つたから、

特に宗学には全力を注いでいた。 お経の意味もよく判り、お聖教の御心持も解せる様にな

り、 仏祖の御恩、 両親の恩、 師長の御恩などを毎日毎夜合掌していた。 その頃の

信仰は「入信の道程」の初めの巻に 詳細に述べて有る様に、親の手元を見、お聖教の文字を眺めて、自身の解決などは何時とはなしに 疾くに出来上がっている様に考えて 何時も教人信の方ばかりに走っていたのである。

お聖教に親しみつつ両三年も夢の様に過ぎて 大正十二年 研究科第三学年の暑中休暇に 帰郷した時、二三回説教を頼まれて、自分では有難い積りで話したのではあるけれども、私のは机上の空論、畳の上の水練であって、嘘では無いけれども自分が生かされていないから、真剣に求められた上岡さんや弘中さん達の心弦には触れない、（『入信の道程』に 詳述）、お二人より「あんな有難いお説教ばかりでは罪惡深重の機が知らして戴けません。唯の唯の味わいは嬉しくなったり、喜ばれたりする思いではありません。まだまだ泣くに泣かれない心が有ると思います」とのお話に、貰えたら嬉しく成らんでどうするか、泣く心が有ればこそお助けではないか、と一時に逆上せる程腹も立ったけれども、今から考えて

見れば 生死の苦海を遠方に眺め、御親の念力を十萬億土に置いてゐるから、「貰えたら」
「有ればこそお助けではないか」と不知不識に遠い未来で戴く他人の信仰の様な考えをして
いた事が愧しくてならない。

そして「上岡さんの信仰は」と訊ねると、「私のは何が何やら判りませんからあの親様に
お問ひんされ」と答えられて、五年十年の勉強も不思議の仏智の前には役に立たない。古語
に「聖教読みの聖教知らず、聖教読まずの聖教読み」と言う御言葉が有るが、心から
有難うても 有難いものに誤魔化されている事が有るから注意しなければならぬ。訳や
理屈が判り心得たりと澄ましているのは 知ったのであつて信じたのではない。聖教の
文字は読めなくても、学問や智慧で通れない関門を開発してこそ本当の聖教読みであ
る。前者であつた私が後者であつた上岡さんに打ち砕かれたのは無理もない。あの時よい
加減な妥協で済ましたなら 私は永遠に救われなかつたろう。今は真の知識だと合掌して

いる。八月六日に上京し、第一の横槍の痕をお聖教で押さえつつ、嵐山の下宿で卒業論文を書き続けていたけれども、母から来た一通の手紙、第二の槍で、平気を粧う事も出来ず、仏を欺し人を化し自分自身迄も誤魔化していた本性の尻尾を出さずにはいられなかったのである。
(取意の手紙)

本当に他力の信の有る方は尠うございます。今頃の坊さんは一寸聞けば他力によく似ているけれども、奥の奥の方になると、自力の教えのように思われます。こう聞いたのが安心だの、こう信じたのが信心だの、疑い晴れたらよい、信が獲られたら何時思い出しても嬉しいやの思いが出る、また懺悔する心も出る、それが起らぬ様では本当の信仰ではないと申されるから、嬉しい時には之でと思い、悪い心が出た時には之ではと悔やみ、何時迄たつても若存若亡はやみません。こんな教え方は駄目でございます。小溝をさらえて何処何処迄も詳しく話してお上げなさい。示談に出て来て問われる方は少々のおもたれはございます。

せんから 心の底から親心を述べてお上げなさいよ。 真宗は自信教人信ですから、自分

に他力の信仰の無い間は決してお説教などしてはなりません。 或書物に若し僧侶が不浄

説法をしたならば追剥よりも未だ悪い、山中で迷うて金銭を追剥に奪われた旅人が里に出る

道を教えてくれと頼んだなら、必ず教えるに違いない、然るに僧侶は取る事ばかり考えて

真実の道を教えないから、折角道を求める同行を三悪道の谷底へ突墮とす様なものである、

と書いてありましたが、あなたは如来様の真実が届きましたか。 親心が知れましたか。

学問も智慧も未来の往生には三文の価値ありません。 泣くに泣かれぬこの心を見貫いて

下さった願力の独ばたらきでございます。 口の先の只と心の底よりの唯の叫びとは、聞く

人への響きが大いに違いますよ。 どうぞ真剣に法の為にお尽くし下さいませ 云々

私が此の手紙を読み終わった時どんな気がしただろう。 総ての恐怖が一時に襲うた様

に 千尋の谷底へ投げ込まれた様に、総ての希望が裏切られた様に、狂乱怒濤に機関の故障

を起こした様に、取返しとりかえの付かない罪惡ざいあくを犯おかした様に、沈黙ちんもくした儘まま自省じせいせざるを得えなかった。
私は一体わたし いったい信仰しんこうを獲えたのでは有あるまいか。 み仏ほとけの勅命ちよくめいに信順しんじゆんしたのならまだまだ喜よろこば

れなければならない筈はずである。 誰だれが何なんといつても動うごかぬ金剛心こんごうしんでなければならない筈はずであ

る。 人ひとから言いわれて氣持きもちの悪い様わるな信仰しんこうでは他力たうりきでは無い。 此この儘ままを赦ゆるすから他力たうりきではない

かと理屈りくつを合あわして見るけれども合あわさない。 考かんえまいとすれば益々ますます考かんえずにはいられない。

払はらえども払はらえども、揉もみ消けせども揉もみ消けせども、疑念ぎねんは募つるばかりである。 妄雲もううんは覆おおうば

かりである。 学問がくもんは判わかっている。 聞信もんしんの一念いちねんに往生おうじようは一定いちじようと言う理屈りくつも知しっている。

經釈きやうしやくの文句もんくを取出とりだして、信しんずれば助たすかる、疑うたがえば迷まよう、明み信しん仏智ぶつちと疑惑ぎわくぶつち仏智ぶつちの得失とくしつは大經だいきやう

下卷げかんに胎化段たいけだんとして顕あらわれ、龍樹菩薩りゆうじゆぼさつは是これを受うけて、「若人種善根にやくにんしゆぜんこん、疑ぎ則そく華不開けふかい、信心しんじん清淨しやうじやう

者しや、華開則見仏けかいそくけんぶつ」と仰おほせられ、選せん択集じやくしゆうの三心章さんしんしやうを 高祖かうそは受うけて正信偈しやうしんげに 「還げん来生死らいしやうじ

輪轉家りんてんげ、決けつ以ちぎ疑情ぎやう為い所止しよし、速入そくにゆうじやくじよう寂靜むいらく無為樂ひつちしんじんいのうにゆう、必ひつちしんじんいのうにゆう以い信心しんぎ為けつ能入ねんにゅう」と 信疑決判しんぎけつばんをされたので

ある。また聖人様は「涅槃真因唯以信心」と仰せられてあるから どうしても信心が無くては往生が出来ない。こんな疑いが出て来るとは 今迄の信心は自分が自分に欺されていたのだろうか。あれ程慶べもし称名も出ていたのに 今は嬉しくも有難うも無い。何故真実に御恩が喜べないのだろうか。今迄のは胃散は胃病の薬、目薬は眼の薬と知っていただけで、墮ちる者をお助けと効能だけ知っていて、墮ちた事が無いから助かった事が無かったのだらうか。胸の中は蜂の巣をつついた様に、蜘蛛の子を散らした様に 乱れに乱れて立派な信心の城郭は 二個の爆弾に依って見事破壊されたのである。

根本から崩され破壊された信仰は、貴重な花瓶に亀裂が入った位な騒ぎではない。真剣に成れば成る程妄念の焰は燃えるではないか。信念を凝らせば凝らす程乱想の渦は巻くではないか。私は何故こんな心が動くのだらう。何故真実に成れないのだらう。俗人から僧侶に成ったのは、人を済度する為ではないか。私がこんなに狂うてどうして人を導く事が出来よ

う。嗚呼情けない。此の儘死んだら地獄に堕ちるではないか。進めば進む程暗くなるばかりで、学問も理屈もこうなれば更に通用しない。飢えた者は食の善悪を言わない。溺れているものは浮木の支えるか支え得ないかを問う暇はない。命を捨てても真実に導いて下さると見込んで無漏田師を訊ねて教えを請うた。涙を注いでの慈誨は一々肺腑に響くけれども、耳の底には唸るけれども、知って知って知り抜いてたった一つ知らない処がある。判って判って判り抜いてたった一つ判らん処が有る。

「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来常に没し常に流転して、出離の縁有ること無しと深信す」と三世に亘って自分には微塵ばかりも真実はないのです。苦悩を抱えて泣く其の心の為に本願が成就したのであります、と仰せ下さる時には、あの文句は善導大師の散善義の機の深信じゃなと思ひ、

「いずれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」と身動きならぬ惡業に縛

られて、決定必定墮ちるのです。聖人様の信仰は墮ちる者じゃがお助けと言う水際の立たぬ信仰ではありません、どちらの御文も共に、「出離の縁あることなし」、「一定すみかぞかし」そこには間一髪も入らない、自力疑心も雑らない、絶対の悪魔の助かる望みの綱のぷつぷり切れた極意は言慮の及ぶ処でないと、愈々の瀬戸際まで話されても、きよろんとしてゐる不実の心、而も今の御文は歎異鈔の第二章の中程に在ると、頭は書物の上を自由に走っているけれど、心のドン底は其の儘の味を納得してくれない、不安な心は更にやまない、一日と八方が塞がり遂にこの信仰の解決が付かなかったら卒業は二年三年遅れても後生の一大事には代えられないと論文は其の儘中止してしまった。

其時の悲壮な思いは今でも戦慄する。何と勇猛な決定だったろう。私の往生の

解決が付かなかったら一切の衆生はどうするだろう。私が救われた時一切衆生も救われるのである。自信が決定した時真の教人信は動くのである。今迄私は何の夢を見ていたのだろ

う。宗教しゅうきようを死後しごの問題もんだいとばかり考かんえていたが、此この苦悩くのうを除のぞいてこそ真しんの宗教しゅうきようではないか。現在げんざいを救すくい切きらない宗教しゅうきようでは死後しごの往生おうじようは当あてにならない。

その儘まま来こいとはどの儘ままか。何処どこが唯ただだ。何処どこに他力たうきが働はたらいているか。こんな心こころの悶もだえがあるのに仏様ほとけさまはどうしておられるのだろう。聞きかない昔むかしの方がどれだけ気楽きらくなかもしれない。

何故なぜ御聖教おしやうぎように書かかれてある事ことが信じ切きれないのだろうか。疑うたがうだけの価値かちのない人間にんげんと知りつつも疑うたがわずにはいられない私わたしが哀あわれではないか。何故なぜ法ほうの手元てもとがみていられないのか。

何故なぜ嫌いやな機きを見る様ように成なったのだろうか。嗚呼ああ判わからない判わからない、文字もんじは判わかっても親心おやこころが

判わからない。それでは八万はちまんの法蔵ほうぞうを知しっても一文いちもん不知ふちと異ことならないではないか。罪惡ざいあくを見れば

見る程底ほどそこが知しれない。一いつ体最後たいさいごはどうなるのだろうか。念仏ねんぶつを称となえながら墮おちねばならない

ではないか。もう其時そのときには溜息ためいきより他ほかには出でて来こない。嵐山あらしやまから本願寺ほんがんじの御真影ごしんえい前まえに跪ひざまずいて

は泣なき、大谷おおたにに詣もつでては泣なく。世よの中なかは暗黒あんこくである、心こころの中なかは墨すみを流ながした様ような気持きもちちであ

る。総会所の説教は聞いているけれど渴を医するには足らない。寝ても寝られず起きても起きられず、御飯も殆んど味が判らず欲しくもない。家におり切らず京都に出て行く。解決が得られなくて泣く泣く帰る。

嗚呼聖人様が往生の一大事の解決は付かず、二十九歳を一期として地上を去らねばならぬ聖徳太子の靈告が眼前に迫って六角堂に御祈願の御心持は今泣いて悶えて法に飢えている私の気持ちと同じであつたに違いない。泣くにも泣かれぬ此の思い、何故真実に成り得ないのだろう。私は仏様と因縁が無いのではあるまいか。今死んだらどうなるのだろうか。一息つがざれば千載に永く逝く、再び人間に生れる事は出来ないではないか。挙げた手が下りなかったら、踏んだ足が上らなかったら其儘が地獄ではないか。判らない、判らない、何もかも判らない。法も判らなければ機も判らない。どうなったらお慈悲が戴けるのだろうか。何か要求があるのなら易いけれども、無条件程難しいものは有りはしない。ああ苦しいではないか。南無阿弥陀仏も出やしない。毎日案じ貫いて見る

けれども五里霧中である。遂に三国伝来の釈尊の霊像に詣で、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、娑婆往来八千遍、幾生も幾生も衆生済度の為に御苦勞下さったお釈迦様、今法龍は泣いています。苦悩の心を抱いて求めています。

釈迦弥陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

われらが無上の信心を

發起せしめ給ひけり

と聖人様も仰せられてありますが、拔苦与樂は仏教の根本、破闇満願は六字の妙用、と承ります。聞けば聞く程考えれば考える程、じつとしてはいられません、八千遍も御苦勞して下さい。くだつたのなら、御無理でもございましょうが、何卒真実の御仏様に遇わして下さいと清涼寺に二時間ばかりも坐っていたけれども、何の霊告も無ければ反応も無い。唯々有る物は暴風驟雨の心ばかりである。参詣人に心を奪われお道具に眼が付き、一心に成れば成

る程心は走るではないか。右から引き寄せて来れば左へ、左から連れて来れば右へ、東に

西に、京都に岩国に、果ては世界中、十方世界に!! 観念も出来なければ修行も出来な

い。また京都へ走るけれども自問自答して見れば問うべき事柄は無く、只々煩惱熾盛の心

に迫り立てられているのである。何故泣かねばならないのか。何故悶えねばならないの

か。人の談話にも耳は傾かない。書物に親しむ勇氣もない。総会所で聞いているけれ

ども喩話ばかりで真剣味が無い。人にはこんな苦勞はないのだろうか。煩悶は無いのだ

ろうか。思い余って「信者めぐり」の主人公三田源七氏を訪ねたけれども北海道へ赴か

れた留守であつた。泣き泣き法蔵に入つて五回も七回も一切経を繰られた法然上人の俤を

俤ばずにはいられなかつた。三経七祖と真宗法要、机の上に並べて泣かずにはいられな

かつた。至心信樂欲生、至誠心深心廻向発願心、一心、憶念、三信、無上信心、

二種深信、専修、三心具足、疑蓋無雜、信心を以て本とする。疑うてはいないのに何故底

の心が承知しないのだろう。

お聖教は読めても心が読めない。一心専念弥陀名号の文は

幾度繰返しても蛙の面に水である。

益々心の唸りは高まるばかりである。

近角氏の

「歎異鈔の講和」も判っている。

今井師の「凡夫そのまま」も読んでいる。

私の心の働

く通りに動いている大慈悲であるから其の儘でよいと書いてあるのも知っている。

何故こ

の心が判らないのか。

向うを見れば真暗闇、今を見れば罪惡深重、後ろをみれば地獄はい

出の私ではないか。

地団駄踏んでも判らない。ぎりぎり舞いをしてでも得られない。

「其儘が聞こえませーん」と口では叫び 上の心は周章しているけれども 下の心は鉛の様で

ぴりつともしない。何故動かんか、何故驚かないか、何故真剣に成れないか、嗚呼出離の

縁は無いなー、思えば思えば胸も張裂けるようである。

僧侶に成りながら珍しくも無い

無量の苦患を受けなければならなかと、全身熱鉄の湯を浴びた様な身慄いをせずにはいら

れなかった。

其時不図、無常の虎の絵を思い浮かべた。

曠空の原をさまよう一人の男が大きな虎に追

いかけられて、断崖絶壁で後にも先にも行かれない。

松の木に登り枝から更に一本の葛藤

に下がった。下は黒々した底の知らない井戸を、三匹の龍は口を開いて待っている。上

では喉を鳴らして虎が待っている。白と黒との鼠が交々来ては葛藤を噛っている。本人

は平気で空を眺め、蜂の巣から落ちて来る蜜を嘗めて喜んでいる。

ああ私はこの絵の通りである。何と危うい芸当ではないか。之が人生の姿ではないか。登

れば食われ堕ちれば吞まれる。時々刻々命の綱は昼夜の鼠に噛られて切れつつあるではない

か。それをも知らないで浮世の歡樂に耽り、蜜を嘗めては喜び、地位や名誉を得ては楽し

む。財産を得ては誇り、妻を持つては罪を造る。今切れたら堕ちるではないか。浮世の総て

が何になる。死の前には三文の価値も無いではないか。身に行うは邪行邪淫ばかりであ

る。心に思うは三毒五欲の煩惱ばかりである。法龍一日の中に八億四千の念がある。念々

の中に為す所は皆三塗の業である。

無明煩惱しげくして

塵数のごとく遍満す

愛憎違順することは

高峯岳山にことならず

と、罪は山程荷うていゝではないか。

恐ろしい業は欠け目なく具足してゐるではない

か。立っていても坐っていても墮ちる。

走っていても寝ていても墮ちる。喜んで

んでも墮ちる。

泣いても笑うても墮ちる。学者も智者も賢者も愚者も平等に墮ちるのだ。

嗚呼法を聞きながら、礼拝しながら、口に称名称えながら、ぎりぎり舞いをしながら墮

ちるのだ。

(殆んど夢中) ああ危ない、噫!! 危ない、どうにもこうにも成れないではない

か。ああ私はどうしよう。泣いても叫んでも墮ちるより他には道は無いのだ。地獄は

一定!! と底から噴き上げたその恐ろしさ!!

同時に命の綱は切落され、黒い焰の燃え上

がる、無間のどん底に投込まれ、「わーと」唸る法龍の声が先か、「唯ぞー」の声なき声が先か。

浮かぶ瀬が無いから唯で救うのだぞ。罪の有りたけ無条件で引受ける親は五年や十年前じゃない。十劫の昔から立ちづめに待っているのだぞ。五劫の間考えていたその時にお前の一念一刹那に起る心の有りたけを見抜いて、悪い心より他に起らぬ心と知っているから悪人を悪人のまんまで救う方法が出来ているのだぞ。どうにもこうにも成れない始末のつかない心であればこそ、本形の儘をはたらかさずして生まるべからざる者をうまれさせたらばこそ私の手柄ではないか。どうか私に任しておくれ!! 嗚呼親様!! と叫んだ時には言亡慮絶の不思議の靈感、法龍一切の無明の闇は晴れ、法龍一切の志願は満足され、善も欲しからず悪も恐れなし。この儘かこの儘か、動きのとれない此の儘が其の儘来いよの正客であったのかと跳び上り踊り舞いして慶んだ。私の毎日毎夜行っている逆謗の心こそ

十八願に契^{かな}うていた心^{こころ}であつたのか。善^よい心^{こころ}に成^なつて行^ゆくのではなかつた、善^よく成^なり切^きれな
い心^{こころ}を赦^{ゆる}されて歸^{かえ}る親里^{おやさと}であつた。信心^{しんじん}戴^{いた}いて安心^{あんじん}戴^{いた}いてと力^{りき}んで行^ゆくお浄土^{じょうど}ではなかつ
た。安心^{あんじん}も信心^{しんじん}も戴^{いた}き切^きらない私^{わたし}を無条件^{むじょうけん}で赦^{ゆる}して下^{くだ}さつた事^{こと}を安心^{あんしん}して歸^{かえ}るのであつた。

ああ墮^おちるも上^あがるも知^しり切^きらない不実^{ふじつ}一杯^{いつぱい}が正客^{しょうきやく}とは不思議^{ふしぎ}な親様^{おやさま}であつたなあ、南無
阿弥陀仏^{あみだぶつ} 南無阿弥陀仏^{なむあみだぶつ} 法龍^{ほうりゅう}称念^{しょうねん}必^{ひつ}得^{とく}往生^{おうじょう}、私^{わたし}は親様^{おやさま}の一人子^{ひとりご}であつたのか。親^{おや}を親^{おや}と

も知^しらないで、何^{なん}とか成^なろうと求^{もと}めて見^みたが、成^なれない儘^{まま}が成^なれたとは仏智^{ぶつち}の不思議^{ふしぎ}でござ
います。こんなに見易^{みやす}い唯^{ただ}でいいのだろうか。開^あいた口^{くち}の閉^{ふさ}がらない程易^{ほどやす}い唯^{ただ}とは知^しらな
だ。唯^{ただ}の言葉^{ことば}もいらない唯^{ただ}である。私^{わたし}の儘^{まま}が南無阿弥陀仏^{なむあみだぶつ}、始末^{しまつ}の付^つかない渦卷^{うずま}きが真実^{しんじつ}
功德大宝海^{くどくだいほうかい}とは愧^{はず}しいやら嬉^{うれ}しいやら。煩惱^{ぼんのう}に底^{そこ}が知^しれないから真実^{しんじつ}の智慧^{ちえ}の高^{たか}さが知^しれな
い。散乱粗動^{さんらんそどう}に果^はてしが無^ないから無辺^{むへん}の宝海^{ほうかい}に限^{かぎ}りが無^ない。南無阿弥陀仏^{なむあみだぶつ}、阿弥陀仏^{あみだぶつ}、
平生業成^{へいぜいごうじょう}の宗旨^{しゅうし}と聞^ききながら死後^{しご}の往生^{おうじょう}を夢見^{ゆめみ}ていたが、肉体^{にくたい}の往生^{おうじょう}を考^{かんが}えていたが、

現生不退げんしょうふたいを知らなんだ。即得往生そくとくおうじょうを知らなんだ。親様赦おやさまゆるして下さい。お釈迦様しゃかさまもお許ゆるし下さ

い。私の悪魔わたしあくまの心を棚こころ たなに置いて、他力たうりきが何処どこにあるか、唯ただが何処どこにあるか、娑婆往来しゃばおうらいは八千遍はっせんべん

なら一度いちどなりとも私の為わたしためにと親おやに熱湯ねつとうを浴あびせ お釈迦様しゃかさまを怨うらんでいましたが、八千遍はっせんべんの

御苦勞ごくろうもこの極難ごくなんの信しんを得えさせんが為ために私一人わたしひとりに働はたらいていて下さったのであったのに!!

諸苦毒中しよくどくちゆう我行がぎようしやう精進じんじん忍終にんじゆう不悔ふけの念力ねんりきは私の狂乱怒濤きやうらんどうを心多歡喜しんたかんぎと転てんぜしめずば置おかないと

言う御親みおやの生血いきちであつたのか!!

釈迦弥陀しゃかみだは慈悲じひの父母ふぼ

諸々に善巧方便しゆじゆぜんぎやうほうべんし

法龍わたしむじやうの無上しんじんの信心しんを

発起ほつきせしめ給たまひけり

嗚呼ああ仏恩ぶつおんは深遠じんおんである。釈尊しゃくそんの鴻恩こうおんは謝しゃし難がたい。私の血汐わたしちしおの唸うなりこそ南無阿弥陀仏なむあみだぶつの唸うなりで

ある。私の動わたしうごく其儘そのままが六字其の儘ろくじそのままの活動かつどうである。機法きほう一体いつたい、仏凡ぶつぼん一体いつたい、絶对不二ぜったいふにの此この

境地、踊躍歡喜せずにはいられない。この嬉しさの余りには、法の為に討死しなければなら

ない。身心共に破れる迄叫び続けずにはいられない。現在に生きよ現在に。

現在に醒めよ現在に。現在に救われ切らない者は未来は当てに成らない。現在に満足

し切らない者は未来の満足なぞ当てにならない。現在に解決しない信仰では未来の往生

は不定であるぞ。

信受本願前念 命終 即得往生後念 即生

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏